OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「らう〈し」考
Author(s)	犬塚, 旦
Citation	語文. 1957, 19, p. 39-48
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68514
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「らう〳〵し」考

犬塚旦

一

源氏物語葵巻の、

つれ〴〵なるままに、只こなたにて、碁打、篇附などし給ひつつ日を暮し給ふに、心ばへのらう〳〵しう愛敬づき、はかなきたはぶれごとのなかにも、うつくしき筋をしいで給へば云々（葵三七三。以下、対校源氏物語新釈本により頁数を示す）

のところに見える「らう〳〵し」について、本居宣長は、玉の小櫛七の巻に、

これは功労の労にて、俗言にいふ物事功者なる事也。こゝも碁うちへんつきのしざまの、さとく功者なるよし也。さて又らうたしといふ詞は、別にして、その意いたくかはれり、思ひまがふべからず。

と説いている。これに対し、島津久基博士は、この説明は一応当っているが、なお検討する余地があるとして、自説を提出せられるところがあった。即ち、博士は「らう〳〵し」には場合によって「らうたし」と弁別できにくいような用例も少くないとされて、

一般に或事に対しての行為の場合は、大略「労々し」の義で釈き得られるが（中略）顔容・声音・心性・挙動（態度）の場合は、「労々し」の意味の時もないではないにしても、寧ろ「愛らしい」の義（中略）が当るやうであり、特に心性・挙動の場合は恰も両者の中間に位置する如き心持の釈が最も妥当感を与へるやうに思はれる。（中略）即ち愛らしい意味に功者の意味の加はったやうな心持が、それらの文の「らう〳〵し」の釈として最も適解として落ちつくやうに感ぜられるのである。かく観て来ると、「らうらうし」は単なる「らうたし」（可愛い）ではない、少くとも可憐の意味よりもっと品位ある乃至は円熟した愛らしさと解してよいのではないか。（中略）恐らく「らうたし」に知性的なものが含まった感じが「らう〳〵し」であるやうに思はれて来る。

との見解を提示せられたのである。(一)博士の説は、「らう〳〵し」の従来見のがされきたった意味性をつかれたものとして、たしかに傾聴すべきものをふくんでいると思われるが、「らう〳〵し」の意味性格は、博士の説をもってはたして満足されてよいであろうか。そこにはまだまだ検討さるべき問題がすどおりされていはしないであろうか。また、ときほぐされていない面が、なおのこされていはしないであろうか。ここに、王朝期文学作品なかんずく物語・日記類にあらわれた「らう」「らう〳〵し」について吟味しなおし、史的にあとづけつつ、「らう〳〵し」そのものをとらえなおしてみよう

と企図する次第である。

二

王朝文学作品における「らう〳〵し」の初見は大和物語（有朋堂文庫本）の一例あたりであろうか。同じく「らう」の語も、管見では大和の五例をもって初見とするのである。（「労あり」「労ある」二例）なお、「らうたし」の語もこの大和にはじめて一例姿を見せている。「らう〳〵し」は故御息所の姉が、妹たちよりも歌をよむことが勝っていたことについて、「らう〳〵しく」といっているのであって、「功者なる」という訳が一応まずあたることはみとめられるであろう。「らうあり」[注]の方もすべて良岑宗貞、玉淵槽垣の御など人に関して用いられ、而も「玉淵はいと労ありて歌などよくよみき」（一二）と見えるごとく、この物語では歌をよみ情趣を解するといったふうの人物にばかり用いられているのであって、「をかし」と並用されて、「いとらうありをかしくて世を経ける」（一一〇）とか「らうあり、をかしき人々あり」（一一〇）とかと見え、「らうあり」には、そうした側面がつねにつきまとっていることを感じさせるのである。「らう〳〵し」にしても、歌をよむことに関して用いられている点、やはり、そこに趣味性といったものとのつながりが思われるのである。とにかく、「らうあり」も「らう〳〵し」も歌をよむことに関して用いられていることを銘記しよう。

つぎに見られるのは宇津保物語（有朋堂文庫本）である。ここには「らう〳〵し」は二十三例、「らう」（名詞）（形）四十例、うち「らうあり」三十六例（「らうある」の誤かと見られるものがほかに一例）、「労す」（動詞）三例が見られる。用例はかなりに多く、意味をたずねる上のてがかりがいろいろと得られる。「らう〳〵し」の方は、俊蔭女（心）、あて宮（心）、忠こそ（心）、千蔭亡妻仁寿殿の女御、仲忠、女三宮、あこき、宣耀殿（正明三女）、あて宮の御子、按察使の君、梨壺の宮の君、梅壺更衣、童二、嵯峨院三などと人物に関して用いられることがほとんどであり、ほかには、贈物のつくり方、琵琶の弾き方、戸口の叩き方といったところで、すべて人ないし人の行為に関するものばかりであることは注意せられてよいであろう。そして、この語は「かたち」の「清ら」「清げ」[二]「をかしげ」「光り輝き」「眩ゆきまで」見ゆるのとならべて、「心」の「らう〳〵しさ」として用いられている場合がしばしば見える。即ち、「心」の「らう〳〵しさ」は「清ら」「清げ」「をかしげ」的外貌となって発現される場合が多いのではないかとの推測をいだかしめずにはおかぬのである。この語が「をかしげ」「愛敬づき」「白く」「花やか」[三]「今めき」[四]等の語とともにしばしばあらわれてくることは印象的であり、とくに「愛敬づき」との親密な関係は見のがしえないものがあるようである。この両者が直接してあらわれること三回であって、（なお「りやう〳〵し」の例ではあるが、「いとふくらかに愛敬づきたる人の、髪長にて、いとりやう〳〵しき」（国譲（上）・下三一六）というのもある。）両者の間に何か濃いつながりの存することが察せられるのである。「愛敬づく」については別稿であらためてとりあげるはずであるが、すでにいくらかふれたものもあるので参照いただければ幸せである。[五]とにかく、「らう〳〵し」が人の外貌的属性を示す場合、あかるい華麗性を連想せしめるもののあることはみとめられるところといえようか。つぎに

宮の君はらう〳〵しく、これはなまめかしくおはすめる。（楼の上（上）・下六一六）

の例は、「らう〳〵し」と「なまめかし」(六)とを対照使用していて注意せられるが、一方、

仲忠、夕ばえしてそこらの人にも似ず、勝れてめでたく容貌の清らなるよりも、さし歩みたる様、うち思ひつるけしき、さらに人に似ず、なまめき、らう〳〵し。（初秋上六四六）

のごとく、「なまめき」と「らう〳〵し」が共存している場合もあるのであって、「らう〳〵し」は「なまめく」「なまめかし」的世界にも、そうでない世界にも顕現しうる性格を示すものであったと考えられ、この点より云々することはしばらくひかえることとする。では、この語の本領はいずれに存するであろうか。まず、琴や琵琶を「おもしろく」あるいは「をかしく」弾くことに関して「らう〳〵し」とつかわれていることは注意されていいであろう。

かたちもいとをかしげにおはすや。坊にも、内裏の宮、若宮よりは、この君をこそ。いとらう〳〵しく故づきてぞ生ひ出で給ひぬべかめり（国譲（中）・下四二五）(七)

とも見えるごとく、この語には「故づき」といった性格をくみとることがやはりできるのではなかろうか。

（あて宮）あるが中に容貌清らに、御心らう〳〵しく、今めきたる御心にもあり、物の心も思し知りたれば、（藤原の君上一〇二）

つまり、「物の心」を知る、趣味あり、情趣を解する、そういう能力をも「らう〳〵し」はつつんでいるのではなかろうか。とにかくこの語には、「物事をよくこころえ、身につけている」聡明さといったものが一貫してうかがえるようである。忠こそについて、

心のさとくらう〳〵しきこと限りなし。（忠こそ上一六八）

といわれているさとさ・賢さといったものが、やはり、この語の意味の中枢をなし、それが、この王朝時代の教養性といったものとの連関よりして、多く趣味性の方向に意味づけられてゆくことになったのではあるまいか。さとい心のはたらき、それが、外貌に、態度に、動作にあらわれたのが、「らう〳〵し」なのであって、主として、趣味的方面において、このはたらきがとらえられて、当期の「らう〳〵し」の意味性を色づけるところがあったのではなかろうか。したがって、心のさとさと趣味性とが、宇津保の「らう〳〵し」を意味づけていると考えてはならないであろうか。而して、人物の外貌の場合、ほとんどが、「愛敬づき」「清げに」「清らに」「をかしげに」「白く」「花やか」等々とあかるい華麗さをあらわす語とともに見えていることはやはり注意せられるべく、ほかには「なまめき」と、「気高くもの〳〵しき」(八)（蔵開（下）二三七・一）と各一回くらいのものである。心理の場合は「さとく」とか、「物の心も思し知り」とか、知性や情趣性に関するものである。以上で、宇津保物語における「らう〳〵し」の用いられ方はだいたい見当がつこうかと考える。つぎに、

賄うちしなどし給ふにも、いとらう〳〵しう、まことに大将の相撲の事などおこなひ給ふにも、いと心深きらうの見ゆれば、あやしく似たる人の心様にもあるかな、と御覧じて、（初秋上六二四）

などに見ても、「らう〳〵し」と「らう」とが、相似た内容性格のことばであることは察せられるであろう。「らう〳〵し」はやはりこの「らう」を畳語にした形容詞であるとみとめてさしつかえなさそうである。さて、「らう」はどのように用いられているであろうか。「らうあり」の形で見えるものがほとんどゆえ、この形のものについて主として見てゆくこととしよう。「らうあり」は、木工の

君、童べ、神南備の蔵人、女、兵衛尉、兼雅二、仲忠、仲頼の少将の妹、女一宮、京人、人四等、人に関して用いられることもっとも多く、ほかに、節会に関し六回、相撲の準備、宣旨、手紙、贈物の品、細工二、模様、食物、さらに、螢の光や、秋の夕暮、所二など自然関係にまでわたっている。人ないし人為的な事物がほとんどであるが、自然関係の用例の見られることは注目に価しよう。まず、能力のすぐれていることを示すものに、

見知らば中らぬもの故、鳥立ちなば興醒めなむ。らうある兵衛尉まづ試みてむや。（初秋上五九八）

のごとき射に関するものもあるが、人間としての能力にはいろいろな方面がありうるわけであり、

たゞ此の世にいくばく、容面、らうある人のなかにも、勝れたる人、この二人こそはあれ（初秋上六一七）

ここらの年頃……見所あること無かりつるに、然こそいへ、只今の大将たちの、例の人にたち勝りたる人にて心づかひせられけむいとらうあるかな。（初秋上六三一）

さらに、「情」の語とともに、

木工の君といふ人、らうあるものにて、「これを聞き知らぬ様なるは、いと情なし」とて（藤原の君上一一五）

らうある女の情あるが（初秋上五九二）

らうあらん所にすゑて、情あらむ草木、花ざかりにも、紅葉ざかりにもあれ、見所あらむ所の夕暮などありて（初秋上六二二）

「かくてものし給ふに、今宵この琴仕うまつる人、いとめでたき人なるを、朝臣なほ内膳につきて、この前の物すこし情づいてたゞ今ものせよ。菓物などいと興ある物をえらびて仕うまつれ」と仰せられければ、この君だちの手をつくして、らうありとある人、殿上人などして、手づから俎にむかひて、まことの有識たち、三四十人して調じ出だしたる、殊にいと清らなり。（初秋上六八五）

などと用いられ、「らう」と「情」との関係はまことに深いものがあるといわなければならない。「らう」は趣味的世界の能力としてとくに意味づけられるところがあるようである。

遊は少将にも優りたり。すべてせぬ業なく、らうありし人なり（蔵開(中)下一六五）

例の声をかへて弾けど、らうある人の御耳なればふと聞き知りて（初秋上六四三）

など、「あそび」の世界に用いられているものもそうといえようし、細工物、模様などに関するのもそうであろう。そして、

労ある物のかた、をかしき物の様など画いつけて（初秋上六九六）

その組いとらうありて、いと珍らしくをかしき事ども組みすゑたる（初秋上六九六）

今めき、らうあらむもの（初秋上六八七）

など、「をかし」「今めき」などの趣味性に関係あることばとともにあらわれているものも、この線で解しうるものであろう。かくて「らうある秋の夕暮」（初秋上六五〇）、「面白くらうある所にたのしび遊ぶ」（吹上(下)上四五五）というのも「風情ある」の訳語をあてうることとなるであろうし、節会の場合またしかりであろう。しかも「らうあり」という以上、やはりそのおくに、知性的な、すぐれた深みをひそませた「風情ある」であることはいうまでもなかろう。以上、見きたつて蔵開(下)冒頭部の涼の詞に、「田舎人」に対して「京人のらうある」と見えていることもうなずけようというものではあるまいか。そこには、都会的な、洗煉された知的はたらき、教養、趣味性といったものが看取できるように思われるのである。而して、その外貌的あ

らわれは、「らうありし人」について、

容貌も気近く、愛敬づきてぞありし。（蔵開(中)・下一六五）

と見えるごとく、いろいろの事に通じ、ねれて円熟し、かどのとれた、親しみある相をとってくるのではなかろうか。「いとらうある組みすゑ」を「いとめでたくなまめき」といい、「らうありとある人」たちの調じ出したものを「殊にいと清らなり」などといっているが、いかめしい、冷い、近づきがたいふんいきを思わせるような用例はまず見あたらないようである。

落窪物語（有朋堂文庫本）には「らう〳〵し」一例見え、

はじめの男君は十二にて、いと大きにおはすれば、宮仕へするともあやまちすべからず、かしこくおはすれば、春宮の殿上せさせ給ふ。書を読み給ふにも、さとくらう〳〵しく心柄もいと賢ければ、若うおはしける帝におはしませば、遊敵に召し遣ひをかしきものに覚して（四六八）

とあり、その賢明な知的意味性は明白である。遊相手とされ、「をかしきもの」に思われるというのも、上来の考察結果をささえこそすれ、これにそむくものではない。

枕草子（岩波文庫本）には「らう〳〵し」四例、「らう」一例。「らう〳〵し」は郭公のほかは人に関して用いられ、

人の謎々合しける所に、かたくなにはあらで、さやうの事にらう〳〵しかりけるが（百二十八段・中一三九頁）

のごとき、謎々に巧みなことを意味しているのであり、

季の御読経の威儀師。赤袈裟着て、僧の文ども読みあげたる、いとらう〳〵し（百四十一段・中一五四頁。ただし古典全書本は「きらきらし」となっている。）

もまた、やはりそのものなれた熟練したようすをいっているものにほかならない。

大納言殿（伊周）は物々しう清げに、中将殿（隆家）はらう〳〵しう、いづれもめでたきを見奉るに（九十三段・中六三頁）

のごとく、「物々しう清げ」と「らう〳〵し」が対照的に用いられていることは、郭公の声に関して、

らう〳〵しう愛敬づきたる（三十九段・上一六五頁）

といわれていることとともに、感覚的用法における「らう〳〵し」の性格を示唆しているところがありはしないであろうか。なお、ほかに「りやう〳〵し」の形で見えているものもあるが、「らう〳〵し」と同様に解してさしつかえないと思われる。墨の久しくつかわれたのを「らうおほきに成りたるが」としても用いている。

以上の考察をかえりみつつ、以下、源氏物語の用例について、さらに検討を加えていってみよう。

三

源氏物語では、さすがに、この語の用例数は、王朝作品中最高を示している。「らう〳〵し」湖月抄本三十五例、河内本三十三例。「りやう〳〵し」河内本に一例。「らう」湖月抄本十四例、河内本十三例。（うち「らうあり」湖四例、河五例）ほかに「らう気」一例。以上が管見に入れるすべてである。やはり、人物に関するものがほとんどであり、なかんずく紫上がもっとも多く、八例（心ばへ五例、心ざま一例）、ほかに紫上の書についても一例見える。つぎは朧月夜・玉鬘・中君の各二回、なお、中君にはほかに書についても一回用いられ、玉鬘の姫君・同中君・明石上心おきて・明石姫君・中将の君・宇治大君・六君・匂宮心・按察大納言心・藤中納言（十才の時・湖）、槿の書等に各一回用いられ、藤壺

は「もて出でてらう〳〵しき事も見え給はざりしかどいふかひありて思ふさまに」として、雲居雁は「いふかひあり、すぐれたるらう〳〵しさなど物し給はぬ」として、浮舟の書に関して「殊にらう〳〵しき節も見えねど」として用いられている。ほかには琵琶を弾くことや祿の綿について用いられているくらいのものである。右に見ても、「らう〳〵し」が、物語中、主要な女性と多く重なっていることに気づくであろう。この語は人の美としていちじるしく、なかんずく、女性美として独自の意義をしめすことを想察せしめずにはおかぬのである。而して、紫上にもっとも特徴的な性格であって、ついで玉鬘・朧月夜に使用率の高いことは、とくに、紫上と玉鬘は河海抄のいわゆる「いづれも心ざまよき人」であり、わたくし自身別に論じたこともあるごとく、作中、女性としては「めでたし」の評語をえている回数もっとも多く、(紫上十玉鬘七)また女の本といったおもむきがうかがわれるのであって、而も、そうした紫上にぬきんでておびただしく用いられていることは、この語の並々ならぬ価値性に由来するものといえるのではなかろうか。まず

(き方はをさ〳〵・・)河内本以下同(・な)　(らう
らう〳〵しうかどめきたる心はなきなンめり。いと・・
たげにおほどき)　(か・・・・・)　(あはれならめ
・・・・・・・こめかしうおほどかならむこそ、らうたくはあ
・・・・)
るべけれ(末摘花二四一)

男君だち、十なるは殿上し給ふ。いとうつくし。人にほめられて、かたちなどよういあらねど、いとらう〳〵しう(きら)(くも)し、物の心やう〳〵知り給へり。次の君は八つばかりにて、いとらうたげに姫君にも覚えたれば、(真木柱二〇一)

姫君はらう〳〵しく深くおもりかに見え給ふ。若君は、おほどかにらうたげなるさまして、(橋姫五)

など見てくると、「らう〳〵し」と「らうたげ」とはやはり、対照的な語であることがしられるのである。同じ可憐美でも「うつくし」は陽性をおび、「らうたし」は陰性をおびていることについては(一〇)すでにふれたことがあるが、「らう〳〵し」は他の用例など見くらべる時、この場合、むしろ「らうたげ」の幼さ・陰性等の傾向と相対するところがあるのではなかろうか。(「らう〳〵し」はどちらかといえばあかるい華麗なおもむきをなしやすく、また「らう〳〵しきものから、若うをかし」(葵三三四)「御手、こまやかにはあらねどらう〳〵しう、草などをかしうなりにけり。まして朝顔もねびまさり給へらむかしとおもひやる」(賢木四一七)などは「らう〳〵し」の幼少性に対する性格を示していよう)

さて、まず「らう〳〵し」が「かど」などと親近性をもつ、知的性格をおびるものであることは、

らう〳〵しきたどりあらむも賢きやうなれど(若菜上三七四)
心及ばぬ事はたをさ〳〵なき、人のらう〳〵しさなれば(藤裏葉二六三)
何事にもらう〳〵しうおはせし御心ばへなりしかば、人の深き心もいとよう見知り給ひながら(幻三二二)
かど〳〵しうらう〳〵しう、匂ひ多かりし心ざまもてなし言の葉のみ(幻三三一)
さるはこの君しもぞらう〳〵しくかどある方の匂ひはまさり給へる(総角一三四)

等が証しようし、高い知性的な香気、深い教養といったものを思わせる用法も見られるのである。しかも、そうした賢明さが趣味の世界に発揮されること多く、

なほ〳〵しきあたりともいはず、いきほひに引かされて、よき若人どもつどひ、装束有様はえならずととのへつつ、腰折れたる歌合物語、庚申をし、まばゆく見苦しく、遊びがちに好めるを、この懸想の君だち、「らう〳〵しくこそあるべけれ。かた

ちなむいみじかンなる」など、をかしき方にいひなして、心を尽しあへるなかに（東屋三）内侍のかみこそは、らう〳〵しく故々しき方は人にまさり給へれ。（橿二八九）いとさとくて、難き調子どもを、ただ一わたりに習ひ取り給ふ大方らう〳〵しうをかしき御心ばへを、思ひし事かなふとおぼす。（紅葉賀二九二）琵琶こそ女のしたるに憎きやうなれど、らう〳〵しきものに侍れ。今の世にまことしう伝へたる人、をさ〳〵侍らずなりにたり。（少女三一一）

など、いずれも、そうした方向につかわれた例どもであろう。「をかし」「をかしげ」がしばしばともなわれるのもこれと関係があらう。さて、「らう〳〵し」は「愛敬づき」二「なつかし」二「うつくしげ」等をともなって親愛的傾向を示すうちにあって、

御方の御心おきての、らう〳〵しくけだかくおほどかなるものの、さるべき方には卑下して、憎らかにもうけばらぬなどを、ほめぬ人なし。（若菜上三五七）

色あひ、あまりなるまで匂ひて、物々しくけだかき顔の、まみいと恥かしげにらう〳〵しう、すべて何事も足らひて、かたちよき人と言はむに飽かぬ所なし。（宿木二五八）

いとらう〳〵しく恥かしげなる気色も添ひて、さすがになつかしう言ひこしらへなどして出だし給へる程の御心ばへ（宿木二六九）

など、「け高し」と並用され、あるいは「なつかし」に対するごとくであってやや例外的な用法を見せている。そこには、教養にうらづけられた思慮ぶかい人の、あるいはととのいたらいたる人の、心にくい知性美の側面を印象せしめるものがある。また、はなやかなふんいきの中に見えているものもある。「愛敬づき」「うつくしげ」の場合もそうだが、「花やか」と並用されたり（紅梅三六七）、「らう〳〵し」き姫君（玉鬘長女）を「匂ひやかなる」ともいっている（竹河三九八）。以上かえりみて、「らう〳〵し」はやはり、その賢明な知的性格と趣味性とがとくに濃厚であり、そして、どちらかといえば、親愛的な、あかるいふんいきをとりやすい傾向にあることをもあきらめえたかと思う。紫上について、

世の中にさいはひありめでたき人も、あいなう大方の世にそねまれ、よきにつけても心の限りおごりて、人のため苦しき人もあるを、怪しきまですずろなる人にもうけられ、はかなくし出で給ふ事も、何事につけても、世にほめられ心にくく、折節につけつつ、らう〳〵しく、ありがたかりし、人の御心ばへなりかし。（御法三一七）

紫の御用意気色の、ここらの年経ぬれど、ともかくも漏り出で見え聞えたる所なく、静やかなるを本として、さすがに心うつくしう、人をも消たず、身をもやんごとなく心にくくもてなし添へ給へる事と、見し面影も忘れがたくのみなむ思ひ出でられける。わが御北の方も、あはれとおぼす方こそ深けれ、いふかひあり、すぐれたるらう〳〵しさなど、物し給はぬ人なり。（若菜上三七八）

と見えているが、これら、源氏および夕霧を通して見られた紫上こそは、まさに「らう〳〵し」のもっとも高い円熟した姿を示すものと評されてよいであろう。源氏は、亡き紫上の「かど〳〵しうらう〳〵しう、匂ひ多かりし心ざまもてなし言の葉のみ、思ひ続けられ」（幻三三一）て涙を流している。そこには、先天的なものと後天的なものとのめぐまれた結合によって創り上げられた玲瓏の円熟美が光っている。

源氏物語の「らう」については、河内本の方に見えるものに、雲

居雁に関し、

らうありけだかきさまは知らず、いとらうたげにて(常夏八三)

と、やはり「らうたげ」と対照的に用いられているのがあるし、玉鬘が「かど〳〵しくらうありて」結婚についてりっぱに身を処したことを「いかにかどある事なりけり」と源氏をして思わしめている(若菜下九八・九)。「かど」との親縁性はおおえず、やはり、ねれた、賢明な知的態度というものを印象せしめられる。なお、「らうあり」は玉鬘に二回、柏木に関して一回用いられている。

つぎに紫式部日記(有朋堂文庫本)の用例を見てみよう。すべて三例であるが、宰相君と宰相君(北野三位の女)と彰子中宮との場合であって、

いとをかしげに髪など常よりつくろひまして、容体もてなし、らう〳〵しくをかし。たけだちよき程に、ふくらかなる人の、顔いと細かに、匂をかしげなり。(三六〇)

ふくらかにいと容体こめかしう、かど〳〵しきかたちしたる人の、うちゐたるよりも、見もてゆくにこよなくうちまさり、らう〳〵しくて、口つきに恥しげさも、匂ひやかなることもそひたり。もてなしなど、いと美々しく、はなやかにて見え給へる。心ざまもいとめやすく、心うつくしきものから、又いとはづかしき所そひたり。(三六一)

などと見え、「かど〳〵し」との親縁性のほども思われるが、島津博士もいわれるごとく、一見しては「かど〳〵しき」容貌という印象をうけるが、よく見てゆくと「こよなくうちまさ」って、「らう〳〵しく」眼にうつってくるというのであって、「らう〳〵し」は「かど〳〵し」よりは一段上位の美感をあたえることばであったと思われる。「をかしさ」・華麗さ・「はづかしげさ」といった印象が、右の例にはうけとれるのである。中宮彰子の「御心あかぬ所なく、らう〳〵しく心にくく」たしなみぶかい資性についても記されている(三六七)。

四

源氏物語以後では、狭衣物語(有朋堂文庫本)「らう〳〵し」五例(ほかに「りやう〳〵し」一例)、堤中納言物語(古典全書本)「らう〳〵し」一例栄華物語(日本文学大系本)「らう〳〵し」六例、大鏡(改造文庫本)「らう〳〵し」二例、「らうあり」一例。以上が管見に入っている。これらについて概観してのち、結論にゆきつくことしたい。

狭衣物語では、一品宮に関して三回、狭衣に関して一回用いられているが、飛鳥井姫君について、

わざとけだかく誠しきよりは、中々様かはりたる打解などより始め、物はかなげにらう〳〵しからぬもてなしなどの、怪しきまでらうたく、(六三)

と見え、やはり「らうたし」と対照的性格をおびていることがうかがわれるのである。狭衣については、

もてなしけはひは、飽くまで気高う恥かしげになまめかしくて御顔はこまかに美しげにらう〳〵しく、愛敬づき給へるにほひは、誠にはな〳〵と、あたりまで匂ひみち給へるなど、所かへて見奉るは、又光ことにめでたく見え給ふ(一四七)

とあって、かれはさまざまな面を取集めかねそなえた美しさにかがやいている。一品宮については、その「まみいと恥かしげに、らう〳〵しく清げ」(三〇〇)であるとか、その「目尻」が「らう〳〵しげ」(三〇二)であり、あるいは「恥かしげにらう〳〵しげ」(四七一)で、煩わしい気持をいだかせるとしてえがかれている。

堤中納言物語のは、少将（三位中将の誤か）の「らう〳〵しく愛敬づき」ているのに対して、中納言は「なまめかしく恥かしげなる」としてえがかれているものである。（逢坂越えぬ権中納言六三）

栄華物語は、道兼、道長、三条院（三回）、一品宮（章子）に関して用いられ、道兼も道長も「らう〳〵しうをゝしう」あったと見えるが、道兼の方はさがなく、道長の方は、道心もあって、人を思いかえりみ、はぐくんで、人望あつかったことがのべられている。三条院については、「らう〳〵しく」、「をかしう」「今めかしう」「恥かしげ」で、「何事もはえある様に坐ば、万もてはやし思し召したり」（二四一）とある。一品宮は「花々と盛りに桜の咲きこぼれたる心地して、気高く匂ひらう〳〵しく今めかしう、をかしげなる」御有様であったという（六一八）。以上、栄華の用例も、道兼のは老獪なかんじをあたえるが、すべて、知的な、あるいは趣味を解する、あるいは華麗性をおびた意味あいを印象せしめられる。

大鏡には、選子が「いというに、らう〳〵しく」あられたこと（一四七）、行成が「すこしいたらぬことにも、御たましひのふかくおはして、らう〳〵しくしなし給ひける御根性」（一七五）であったことがのべられている。「らうあり」の方では、玉淵が「いとらうあり」て、歌など上手によんだと見えている。

以上、ごく大ざっぱな概観になってしまったが、「らう〳〵し」は紫上や中宮彰子などにそのもっともすぐれた高度なあらわれを見せ、道兼あたりに、もっとも低次の相を示しているかと思われるがいずれにせよ、その知的なささ、賢さといったものは、いずれにも一貫して見られるところであり、かつ、それが趣味の世界に発揮されること多く、而して、全体としては、どちらかといえば、親愛感を人にいだかせ、華麗な外貌をとりがちな傾向にあることもいえようかと思う。けだし、人格を、生活態度を、容姿を、時代理想の規準へと高めてゆくための知的営為、教養といったものが、そしてその結果が、「らう〳〵し」という相をとって具象されていったのではないか。かくして、そのもっとも高い達成をとげたのがまさに紫上であったと考えられるのである。島津博士のごとく「らうたし」に知性的なものが含まった感じが「らう〳〵し」であるとすることには、なお問題があるのではなかろうか。「らう〳〵し」はあくまで「らう〳〵し」であって、その知的営為が時代規準に向って発揮されてゆく時、この時代の理想美と、結果としてかさなってゆくことになりうるまでであって、当時愛好された美が「なまめかし」であり、「清ら」であったことよりして、すべては、おのずとそうした目標へと志向され、みがき上げられてゆくことになったのではなかろうか。「らうたし」はいうまでもなく、「なまめかし」系に属し、混性をおびた可憐美をあらわすことばであった。「らう〳〵し」が近接を示したのは、同じ「なまめかし」系でも、むしろ、あかるい傾向をおびたものであったのであって（愛敬づく、うつくし等）、むしろ「清ら」的なそれにかたむいていたというのがより事実に近いのではなかろうか。思うに「らう〳〵し」がこの時代にとってもっとものぞましい発現のかたちをとる時、おのずから、それは時代の理想美の中にその座を見出してゆくことになったといえよう。島津博士のごとく説くことは誤解をみちびくおそれなしとしないのである。ただ、この語にどのような漢字をあてたら適当かということについては、博士もいわれるごとく、「良々」も「労々」も後世的な考え方からの宛字にとどまるのではないかと考えられ、い

まとくに適切と思われるものも思いあたらない。本稿においては、さらに、「かど」「かど〳〵し」についても検討する予定であったが、紙幅の都合で稿をわかつこととした。ただ、「かど〳〵し」が「うるはし」系に位置して、情味にとぼしく、ものものしい感じをともなうことのみ記しておく。「かど〳〵し」の究明はやがてまた「らう〳〵し」の理解を助けるところが多いであろうと思われる。

（昭和三一・三・二一稿了）

註

(一)島津久基博士「らう〳〵し・らうたし」（「国語と国文学」第二十一巻第九号、「国文学ノート」所収。なお、同博士著対訳源氏物語講話(6)葵の二九五頁から三〇六頁にわたってのべられてもいる）。

(二)拙稿「清ら・清げ私見」（芸林第六巻第四号）。

(三)同「『匂ふ』『匂ひやか』『花やか』考」（平安文学研究 第十五輯）。

(四)同「今めかし考」（国語国文第二十巻第三号）。

(五)同「源氏物語の『うつくし』と『らうたし』」（平安文学研究第十一輯）。

(六)同「なまめかし考」（芸林第三巻第三号）。

(七)同「『ゆゑ』と『よし』」（未発表）。

(八)同「あて附け高し」（ぱんせ第二十三号）。

(九)同「源氏物語における理想美の問題」（芸林第五巻第二号）および「源氏物語の華麗美—『今めかし』追考—」（昭和二十八年十一月三日京都大学国文学会研究発表会発表）。

(一〇)註五参照。

(一一)註三参照。

(一二)拙稿「源氏物語における理想美の問題」。

——京都府立嵯峨野高校教諭——